

第十一回世界俳句協会日本総会報告

鎌倉 佐弓

街路樹に若葉がそろい始めた四月二十九日、第十一回世界俳句協会日本総会、第五回世界俳句セミナーが東京・板橋グリーンホールで開かれた。ゲストは駐日モロッコ大使館員で詩人のアブデルカデール・ジャムッスイならびにベトナムの在ホーチミン日本国総領事館員で国際日本文化研究センター研究員のグエン・ヴークインニューと国際性も豊かである。

総会の司会は清水国治。始めは、協会の年刊出版『世界俳句二〇一六 第十二号』（七月堂、二〇一六年）の編者の夏石番矢から同著が四八ヶ国三三言語、一六四人による多言語俳句選集となったことの報告。さらに鎌倉の会計報告、二〇一五年九月四日から六日にかけて東京で開催された「第八回世界俳句協会大会」の山本一太郎実行委員長による報告記と続いた。この大会参加国は全部で十四カ国、人数も三日間で百六十名参加というものだった。その後ゲストのジャムッスイからモロッコでの俳句の進展、および七月に開催予定の「第二回モロッコ俳句セミナー」についての説明、続いて出席者全員による活動報告が行なわれた。

これに続く第五回世界俳句セミナーは、先の二人のゲストにスペイン文学研究者の齋藤康子を加えて行なわれた。司会は夏石番矢。

まず木村聡雄がジーン・ルブラン編『Heart Breaths』（サイバーウィットネット社、インド、二〇一六年）について発表。この現代俳句アンソロジーは、米国人のほかにカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、日本などで、世界俳句協会が発行している『世界俳句』とは異なるメンバーが登場し、作品も新しさと多様性がある。

清水国治は、俳人伊丹三樹彦について、写真と俳句を一緒にした写俳の先駆けであると同時に、今年九七歳になるが、ますます元気で句作に熱心なことを「蓮咲いて 風その上を その下を」の分かち書きに触れながら言及。

鎌倉は、清水国治の三冊の俳画集を取り上げ、清水国治の俳画があることによって、芭蕉が心や自然の機微を詠もうとしていたこと、清水国治自身の持つ大胆さ、夏石番矢の句のダイナミックな躍動感がよく理解できるとした。

会津太郎は、夏石番矢、鎌倉佐弓著『百俳句』（サイバーウィットネット社、インド、二〇一六年）の収録句の自由さについて例を挙げながら発表。

ベトナムのグエン・ヴークインニューは、俳句雑誌『トー俳句』（ハノイ俳句クラブ、二〇一六年）をもとに、ベトナムの自然を生かした俳句作りの試み、芭蕉の俳句の研究など紹介。次の句は特に驚きと感心をもって読まれた。

Giọt cà phê	コーヒー一滴
Không nói gì	もの言わず
Không nói gì	もの言わず
Tru Vũ	チュー・ヴー

(和訳 グエン・ヴークインニュー)

齋藤康子は、専門のスペイン研究を生かして田澤佳子『俳句とスペイン

の詩人たち』(思文閣出版、二〇一五年)を丁寧に読み解く。スペイン語圏に初めて俳句が導入されたのは一九一九年、メキシコの詩人ホセ・ファン・タブラーダによると信じられてきたが、実は一九〇七年にはすでに俳句はスペインに知られていたという事実は、我々日本人にとって貴重である。

夏石番矢は、金子美都子『フランス二〇世紀詩と俳句 ジャポニスムから前衛へ』(平凡社、二〇一五年)をもとに、フランスのポール＝ルイ・クーシュー、ジュリアン・ヴォカンス、ポール・エリュアールの三名の俳句が、日本の俳句に比べてもいかに斬新だったか、わかりやすくまとめた。また現代のフランスのジョルジュ・フリーデンクラフト『夢の小道で 命に音楽を入れるための詩』(デイエリ・サジャ社、パリ、二〇一五年)では、俳句でも一行、三行など自在な詩形式であることを指摘した。

石倉秀樹は、『世界俳句二〇一六 第十二号』に掲載された五つの俳論を簡潔に発表した。夏石番矢の「俳句と世界」は、俳句が三つの要素によって一つの世界を生み出し、それがこれからも世界に俳句が広がる上で欠かせない。モロッコのアブデルカデール・ジャムスイ「アラビア語俳句は可能か」は、アラビア語圏の詩の歴史に触れつつ、俳句の将来について可能性に満ちている。米のジェームス・シェイ「循環的な影響—俳句の翻訳」は、俳句という詩の翻訳は、誤解もあるがかえって豊かなものを生み出す。ポルトガル・ブルガリアのズラトカ・ティメノヴァ「俳句、女の色彩」は、俳句の持つ女性性について鋭くかつ自在な思考を展開している。小川静枝「フランス圏などの俳句」は、カナダ、ベルギー、フランス、アイルランドなどの詩祭での経験から、実際に俳句が人々の中に生きていることのレポートである。

その後、懇親会場のレストラン・サンイチに場所を移し、八木美知依による二十一弦あるいは十七弦箏の独奏、ならびに伴奏で俳句の朗読が行なわれた。彼女のダイナミックかつ繊細な演奏はこれまでの日本人の箏の常識を超えるもので、すでに六十カ国から招かれ演奏しているのもうなずける。ここでの司会は竹凡。

主な多言語俳句朗読の作品。

土の底
川は泣いている
明日の町 グエン・ヴークインニュー

Sâu trong lòng dat
sông thon thuc
thành pho cua ngày mai Nguyen Vu Quynh Nhu

国王の最後の夢はピラミッド 会津太郎

His last dream
is an eternal life
…the pyramid Taro Aizu

山笑ふ天高く詩客小さきと。 石倉秀樹

shān xiào tiān gāo shī kè xiǎo Hideki Ishikura

「春だ」叫んで大地は口を閉じた 鎌倉佐弓

The earth cries out,

“It’s spring”
and closes its mouth Sayumi Kamakura

インドラの横走りの火矢人叩く 竹凡

Divine Indra
Zigzag lightning arrows
Beating mankind Chikubon

冬の朝階段の音にもうひとりの我 夏石番矢

In the echose of the stairs
Another me
Winter morning Ban’ya Natusishi

柿一つされど無限の青き空 長谷川隆

A few kakis
surplus of
emptiness Takashi Hasegawa

丘の上の虹透き通る約束 野谷真治

A promise :
the rainbow will become transparent
on the hill Shinji Noya

木の陰が鱗のごとし秋の道 山岸竜治

The shadow of trees
look like squamae
an autmun road Ryuji Yamagishi

なお、齋藤康子はスペインのフェデリコ・ガルシア・ロルカの詩から「ギター」を美しいスペイン語で朗読した。

会の様子はインターネットの YouTube でも見られる。

第 11 回世界俳句協会日本総会ビデオ

http://www.worldhaiku.net/movie/11th_J_conf_videos.html